

第3部（小学校5年～6年生）入賞作品



特
選

消えないで まちの魚屋さん

私は魚が好きです。魚屋さんに行って、自分で魚をさばくのが好きです。毎週末、魚屋さんに通っています。その魚屋さんは、この40年でたくさん減ってしまったそうです。もうこれ以上魚屋さんが減ってほしくない！私が大人になっても、大好きな魚屋さんが残っていてほしい！そのために、まちの魚屋さんのことを調べて、みんなに知ってもらいたいと思います。

佐世保市内の鮮魚店の数

年	鮮魚店の数
昭和40年	189軒
昭和50年	169軒
昭和60年	149軒
昭和70年	129軒
昭和80年	109軒
昭和90年	89軒
平成00年	69軒
平成10年	49軒
平成20年	29軒
平成30年	20軒

佐世保市の鮮魚店は昭和60年には189軒あった。しかし、お店の数は年々減っていき平成28年には35軒にまで減ってしまった。（長崎県統計年鑑より）平成28年以降のデータがなかったの自分で佐世保市内を回って調べてみたら現在は20軒しかなかった。

アンケート対象：佐世保市内の鮮魚店20軒

Q.創業何年ですか？(回答数19)

創業年	数
0年	0
10年	0
20年	0
30年	0
40年	0
50年	0
60年	0
70年	0
80年	0
90年	0
100年	0

創業50年以上のお店が多く、中には100年以上続いているお店もあった。ほとんどのお店で2代目～3代目の人が営業していた。

Q.従業員は何人ですか？(回答数20)

人数	数
1人	2
2人	8
3人	1
4人	4
5人	1
6人	1
7人	0
8人	0
9人	0
10人	2

2人で働いているお店が最も多かった。8軒中6軒は、60代以上の方だけで営業しているお店だった。

Q.働いている人の年齢を教えてください(回答数20)

年齢	数
80歳以上	0
70～74歳	0
60～64歳	0
50～54歳	0
40～44歳	0
30～34歳	0
20～24歳	0
10～14歳	0
0歳	0

70代が最も多かった。その次に多かったのが40代で、親子で働いているお店が多かった。

鮮魚店で働く76人のうち60歳以上が39人で、半数以上を占めた。逆に20代30代の人は10人しかおらず、若い人がとても少なかった。

Q.跡継ぎはいますか？(回答数20)

状況	数
いる	3
いない	13
未定	4

跡継ぎがいるお店は20軒中たったの4軒だけだった。

魚屋さんの声
「魚屋さんは朝早い仕事が大変だから、子どもには継がせなかった。」
「スーパーマーケットが増えて、お客さんがスーパーで買い物をするようになり、とんと魚屋さんが減っていた。」
「コロナ禍で人の集まりが減り、お刺身の鉢盛の注文も減ってしまった。それでは減ったお客さんを見る。」
「若い人の魚離れが進んでしまった。もっと魚を食べしてほしい。」

まとめ

6月に下関の唐戸市場に行った。唐戸市場だけでも魚屋さんが20軒以上あった。下関の人口は248,108人(令和5年7月現在)佐世保の人口は233,931人(令和5年8月1日現在)人口はあまり変わらないが、海面漁業・養殖漁業の産出額(令和3年)は山口県は133億円、徳島県は100億円、長崎県は936億円と全国2位(令和3年)こんなに差があるのに佐世保より下関の方が鮮魚店は多いし、唐戸市場はお客さんがたくさんいて、働いている人も若い人が多かった。

今回の調査で初めて行く魚屋さんもあったがみんなやさしくて、たくさんのお話を聞かせてくれた。昔の話をしてくれたり、レシピを教えてくれたり、実際に魚屋さんに魚をさばかせてくれたお店もあった。魚屋さんは新鮮な魚を売ってくれる。お店の人とのコミュニケーションもとても楽しい。これはスーパーマーケットの魚コーナーではできないことだと思う。魚屋さんを残すことは佐世保にとって大事だと思う。佐世保にはおいしい魚がたくさんあるから佐世保の魚屋さんも、もっともっとにぎわってほしい！私が大人になっても、魚屋さんがずっと残ってほしい！そのために、私にもできごとを考えてみたい。

【題名】

「消えないでまちの魚屋さん」

【学校名・学年】

九州文化学園小学校・5年

【製作者】

末吉 真梨(すえよし まり)さん

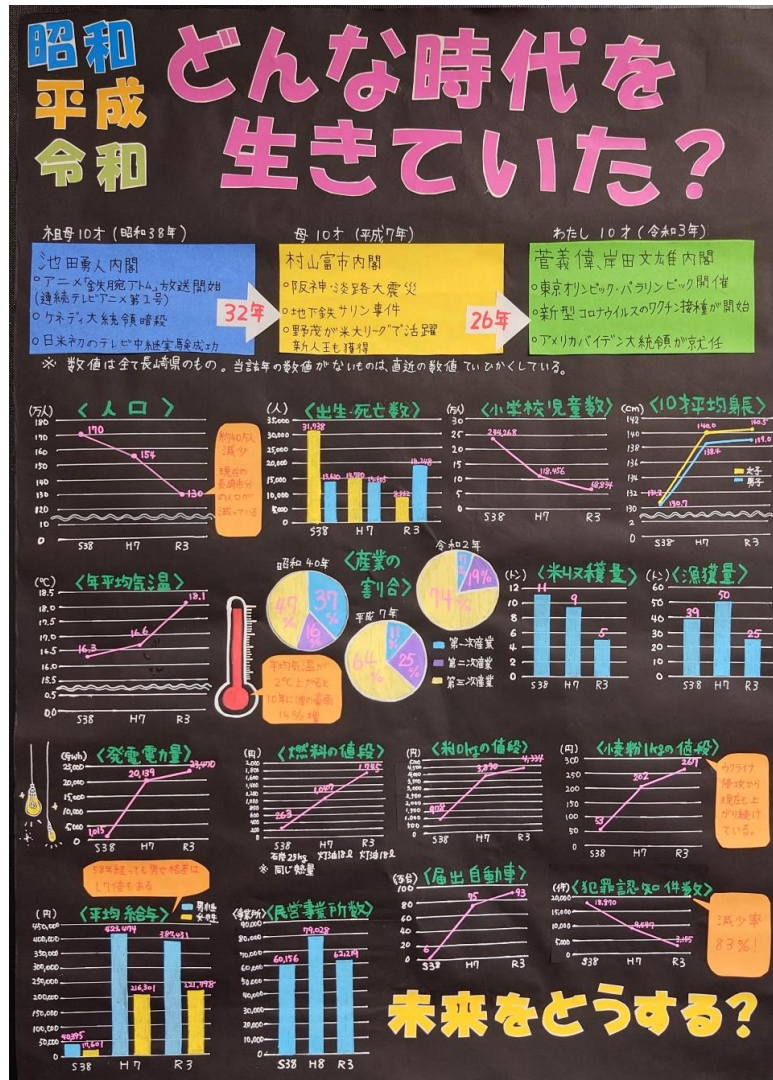
【講評】

魚のことが大好きで、魚と町の魚屋さんを守っていきいたいという強い思いがよく伝わってきます。長崎県統計年鑑や各自治体のホームページを利用して、正確なデータを収集していることや、データにないものは、自分の足で市内全ての店を周り、情報を収集している点が評価できます。また、魚屋さんに消えてほしくないという主張をするため、目的に応じた質問をし、調査を実施している点もすばらしいです。調査をしていく中で、町の魚屋さんとの触れ合いの大切さに気付いたことは、きっと今後の財産になると思います。

第3部（小学校5年～6年生）入賞作品



特選



【題名】

「昭和 平成 令和 どんな時代を生きていた？」

【学校名・学年】

長崎市立西城山小学校・6年

【製作者】

田崎 芽唯(たさき めい)さん

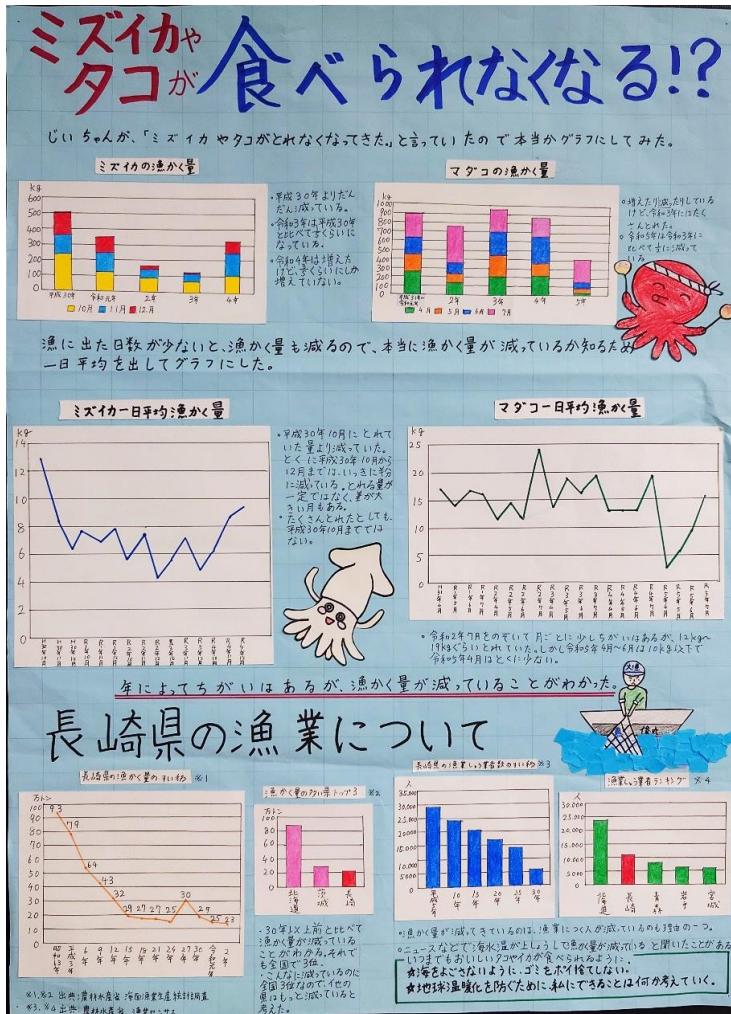
【講評】

ただの長崎県の歴史の勉強ではなく、祖母と母が自分と同じ10才のときには、どんな世の中だったのだろうと考え、それを調べた発想がユニークですばらしい作品です。人口や出生数、平均気温など、よく目にするデータから始まり、米の収穫量や漁獲量、最後の犯罪認知件数に至るなど、様々なことを調べています。おそらく、日常生活の中で、「これって昔はどうだったんだろう」という興味を持つ対象がどんどん広がっていったのだろうと推察します。また、グラフに表す際に、棒グラフや折れ線グラフ、円グラフなどの様々なグラフを使って、視覚的に捉えやすくまとめているところも評価のポイントです。

第3部（小学校5年～6年生）入賞作品



特選



【題名】

「ミズイカやタコが食べられなくなる!？」

【学校名・学年】

諫早市立西諫早小学校・6年

【製作者】

加世田 姫夏子 (かせだ ひなこ) さん

【講評】

身近な祖父の発言から興味を抱き、それを調べてみようとして実際に調査した行動力が素晴らしいです。どんなことにも疑問をもち、自分で確かめようという探求心はとても大切です。ミズイカとマダコの月ごとの漁獲量を見やすくするために、色分けしてグラフ化するところや、本当に漁獲量が減っているか調べるために、一日平均を調べたところも評価のポイントです。イカ・タコをきっかけとして、漁業全体に目を向けた結果、環境問題を考えることができ、よい学習になったのではないのでしょうか。

